怪獣はなぜ日本を襲うのか？

長山靖生

はなぜ日本を襲うのか？

靖生

筑摩書房

著者略歴
長山靖生（ながやま・やすお）
1962（昭和37）年生まれ。鶴見大学歯学部卒。歯学博士。文芸評論、社会時評、科学史研究など多岐にわたる活動をとおして近代日本のイメージを刷新する仕事を手掛けている。1996年，『偽史冒険世界』（ちくま文庫）で第10回大衆文学研究賞を受賞。他の著書に『鷗外のオカルト、漱石の科学』『人はなぜ歴史を偽造するのか』『父親革命』『彼らが夢見た2000年』（以上新潮社）、『「吾輩は猫である」の謎』（文春新書）など多数。編纂書に『海野十三全集』『少年小説大系』（以上三一書房）など。

怪獣はなぜ日本を襲うのか？

2002年11月25日　初版第1刷発行

著　者———長山靖生

発行者———菊池明郎

発行所———筑摩書房
東京都台東区蔵前2-5-3　郵便番号111-8755 振替 00160-8-4123

印　刷———明和印刷

製　本———鈴木製本所

装　幀———岡田和子

© 2002 YASUO NAGAYAMA
ISBN4-480-82351-4 C0095　Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが下記に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。ご注文・お問い合わせも下記へお願いします。
〒331-8507　さいたま市櫛引町2-604　筑摩書房サービスセンター
TEL. 048-651-0053

目次

第一部　怪物出現

ゴジラは、なぜ「南」から来るのか？　6
畏怖と憧憬のモンスター　神話・科学・無意識の怪獣　31
怪人の来る夜　初期仮面ライダーの思い出　43
怪獣――あるいは告白する普遍性　52

第二部　怪物製造人発掘

渋江保　明治のオカルトブームと文豪の謎　66
ユートピアに憑かれた男・村井弦斎　87
小酒井不木　横断する知性　109
小栗虫太郎と不在の南洋　124
人間玩具説のひと　山田風太郎　137

第三部　「不在」の怪物

二〇世紀の終わり方　148
「偽書」の日本史　165
『西遊記』とサブカルチャー　183
医学の夢、生命の夢、手塚治虫の現実　198
あとがき　あるいは、怪人のいる朝　220

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

怪獣はなぜ日本を襲うのか？

第一部　怪物出現

ゴジラは、なぜ「南」から来るのか？

人間の眼差しは、どうやら眺めている対象そのものにではなく、「それを超える何か（etwas Mehr）」へと注がれずにはいられない特性を持っているらしい、と感じて思わず深いため息をついてしまったのは、横田順彌さんのお宅に伺った際に、カバヤ文庫版『ターザン』というとんでもない本を読んでしまったためだった。昭和三〇年頃に出版されたらしいこの本の解説には、なんと「ターザンは北アメリカのインディアンに古くから伝わっている伝説なのを皆さんはご存じですか」と書かれていたのだ。

ご存じも何も、ターザンはアフリカの話ではないのだろうか、と首を傾げつつ読んでいくと、なんだか、この本にはインディアンが出てくる。と同時に、象もライオンもトラ（！）も出てくるではないか（もっとも、トラは本物の『ターザン』にも出て来る。インドじゃないのに）。どうやら、この北アメリカはアフリカともインドとも地続きであるらしい。

いったいここは、どこなのだろう。考えると、頭が痛くなってくる。

はっきりしているのは、これが「南方」だということだ。それは地理上の「南」ではなく、ただひ

たすらに「南っぽいもの」すべてを登場させた豪華な（？）南方マンダラの冒険世界だということだ。そう考えても、依然として無茶であることには変わりはないのだが、思わず納得するところがあった。なにしろ日本的物語の文脈によれば、南方には怪獣だって棲んでいるのだから。

怪獣はなぜ、「南方」から来るのか？

それにしても、ゴジラに限らず東宝の怪獣物の主人公は、まるでお約束のように南から出現する。周知のようにゴジラは南太平洋の出身であり（『VSキングギドラ』で大森一樹監督は、その出身地をラゴス島なる場所に特定してしまった）、また映画『モスラ』（昭和三六年）以来、ゴジラに並ぶ人気を誇ることになるモスラはインファント島というポリネシア近くの島の聖なる生物であった。さらに『キングコング対ゴジラ』（昭和三七年）のキングコングはファロ島なる南太平洋の島、また『キングコングの逆襲』（昭和四二年）版のキングコングはモンド島という、これまた南の島の出身だったと記憶している。

それどころか、東宝にはその名も『ゴジラ・エビラ・モスラ　南海の大決闘』（昭和四一年）や『決戦！　南海の大怪獣』（昭和四五年）という、ほとんど「怪獣物とは〈西部劇〉ならぬ〈南海劇〉である」といわんばかりの作品もある。

いや、怪獣は単に出身地が南方というばかりではない。その生存を人工的に管理する場合においてさえも、なお彼らには〈南〉こそがふさわしいという映像的神話が繰り返し強調されていることも、我われは忘れてはならないだろう。それは『怪獣総進撃』（昭和四三年）において地球産の怪獣たちが集められている怪獣ランドが設置されているのが小笠原諸島であることや、『海底軍艦』（昭和三八年）

で、怪龍マンダを神と崇めながら事実上飼育しているムー帝国の位置が南太平洋の地底であることなどに、象徴的に見ることが出来るだろう。ここで「南方生まれの彼らを南方で飼うのは自然ではないか」という議論が成立しないのは、シベリア出身のアンギラスや東北出身のバランまでもが小笠原に棲まわされているという、その事実から見て明らかであろう。この処置は、あくまで象徴的なものであって、けっして怪獣という生物の生理を配慮しての結果ではなかったのだ。

だが、それはなぜなのだろうか。どうして怪獣たちは南からやって来るのだろうか。どうして南は怪獣にふさわしいのだろうか。

あこがれの人外魔境

この問題に対する答えは、実はさまざまな位相を持っており、いくつもの「正解」が隠されているのだが、まずは順当なところで、日本の秘境小説における、その起源を確認しておきたい。

東宝怪獣映画第一作となった『ゴジラ』（昭和二九年）の原案を執筆した香山滋は、自作に架空の生物を登場させたり、滅びゆく原始的光景への回帰を謳い上げた作品で人気を博していた探偵小説家である。彼は古生物学に詳しく、また実在の貴重種についての豊富な知識も持っており、ことに日本人にはなじみの薄い両棲類・爬虫類に深い興味を寄せていた。それを背景にして香山は小説のなかで数々の「怪物」を創造していった。『オラン・ペンデクの復讐』のスマトラ島に生息する水棲人類オラン・ペッテ、『海鰻荘綺譚』の深海電気ウナギ、ハイドラーナ・エレクトリス、『蜥蜴の島』の古代爬虫類デモノザウルス……。

ところで、こうした香山滋の活躍に先行する作家として、まず取り上げなければならないのは探偵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小説家の小栗虫太郎であろう。夢野久作の『ドグラ・マグラ』と双璧をなす戦前探偵小説の金字塔『黒死館殺人事件』の著者である小栗虫太郎は、また同時に『人外魔境』シリーズなどの秘境冒険小説の作者としても知られていた。

『人外魔境』は種村季弘が「異国趣味的な冒険綺譚」と規定しているように、およそ考えられる限りの秘境魔界を経巡って物語が展開するシリーズだった。たとえば、香山の『オラン・ペンデク』と対応するかのような『有尾人』の舞台は、「悪魔の尿溜」と呼ばれる熱帯の未踏地帯であり、周囲の湿林は濃稠な蒸気に覆われ、その上空には恐ろしい蚊蚋の大集雲が濃霧のようにたちこめているという〈閉ざされた秘境〉であった。

数多の秘境冒険小説家のなかで、香山滋の先達というとすぐに小栗虫太郎が想起されるのは、「冒険小説」という本来明朗で広がりのあるイメージを帯びた分野にあって、この二人は、なぜか「閉じた自然」、「囲い込まれた自然」を舞台とした閉鎖的世界を描くという共通した特徴を持っていたからである。ただし、小栗の場合、『遊魂境』における「冥路の国」が氷河の奥に閉じ込められていたように、場自体が力を持った結界的世界であるのに対して、香山のそれは自然そのものが文明によって包囲されているという切ない喪失感を喚起するという決定的な相違があった。

また、冒険小説となるとなぜかほとんど常に南米を舞台にすることにしていたらしい橘外男も、考えてみると、こうした「南方」派の一員といえるかもしれない。

おそらく唯一の例外は久生十蘭で、彼の冒険小説『地底獣国』は、アンギラスにつながる北方（シベリア）系の怪獣綺譚として孤高を保っているというのが実状である。

もちろん、大正期から昭和戦前期にかけての冒険小説における南方偏重のそのさらなる起源は、明

治の冒険小説家・押川春浪や矢野龍渓などの作品にまで遡ることになるだろう。彼らの小説における南方とは、未開という「野蛮」イメージと同時に、汚れなき「神聖」イメージをも体現する空間として取り扱われていたのであった。

このような香山滋と円谷英二が一堂に会したとき、映画『ゴジラ』の方向性は約束されたといっていい。

ゴジラはなぜ「二百万年前」の生物なのか

しかし、なぜゴジラは恐竜でなければならなかったのだろうか。

『ゴジラ』は、当初から恐竜を主人公とする物語として想定されたものではなかった。特撮映画研究家の竹内博氏によれば、東宝のプロデューサー田中友幸が円谷英二に「何か特撮映画を」と相談したとき、円谷が最初に考えたのは大ダコが登場する海洋映画だったという。つまりこの段階では、ゴジラが恐竜である必然性は、まだ存在していなかったのである。

考えてみると物語に現われる怪物としては、恐竜のようなトカゲ型爬虫類よりも、むしろもっと現実的に身近な生物が巨大化したものが、伝統的な怪異譚の類型であった。それは大ガマや大蛇、大蜘蛛であったり、クラーケンのような大ダコであったりした。実際、円谷はかなり大ダコのイメージにこだわったといわれている。

このようにして流動的であったプレ・ゴジラ案に、恐竜という姿を与えたのは、製作会議の過程で、大ダコでは迫力に欠けるとして、田中プロデューサーが恐竜案を主張したためだった。

かくて恐竜を主人公にするという設定は確定した。その破天荒な案を、キワ物ではない本格的な映

画に仕上げるために、原案執筆は香山滋に依頼されることになったのだった。そして香山は、自らの知識と遊び心を結集し、恐竜という限りなく幻想に近い実在の生物を用いて、恐るべき現代の神話を作り上げていったのだった。

香山滋に限らず、恐竜は、我われにとって郷愁を感じさせる存在であるらしい。しかしどう見積もっても二百万年前よりも起源を遡ることのできない人類が、どうして一億年前に滅び去った大型恐竜に対して懐かしさを感じることができるのだろうか？

『ゴジラ』のなかに古生物学者の山根博士が、召喚された国会の専門委員会の席上、ゴジラの出自について次のように説明する場面がある。

「今からおよそ二百万年前、恐竜やブロントザウルスなどが全盛を極めていた時代……学問的にはジュラ紀というのですが……その頃から次の時代白亜紀にかけて、極めて稀れに生息していた海棲爬虫類から、陸上獣類に進化しようとする過程にあった、中間型の生物であったと見て差支えないと思われます。仮にこれを大戸島の伝説に従ってゴジラと呼称します」

ここで我われはまず、その説明のあまりのいい加減さに驚き、眼を奪われてしまう。地質学・古生物学に詳しかった香山滋が、なぜこうした架空の地質史を『ゴジラ』の物語の基礎に置いたのだろうか。我われとしては、あえてそのような詐術を用いてみせた彼の心理を推測するより他ないだろう。

「人類＝恐竜」という近代の神話

原始人類と恐竜が同時に存在するという架空のイメージは、一般向けの読み物はもちろん、一九世紀には生物学書においてさえ、「我われ人類は恐竜との戦いに打ち勝って生き残ってきた」といった

形で跋扈(ばっこ)していた。

だが、恐竜をはじめとする古生物の存在を、最も巧みに自己の欲する説話のなかに組み入れてみせたものが日本にはあった。急激に推し進められた近代化に伴う社会不安と上昇への欲望のなかで派生、発展を遂げていった新興宗教による創作神話の場においてである。

その直接の契機は、明治維新で江戸時代の宗門制度が廃止され、宗教は自由に信者を獲得することが出来るようになる一方、人びとも自由に信仰の対象を選べるようになったことにあった。いわば宗教の自由市場化が出現したのである。この事態に最も深刻な打撃を受けたのは神道系の宗教団体であった。というのも、神道系の諸派には、キリスト教や仏教のような明確な教義、教典がなかったからである。古代からの自然崇拝をそのまま伝えてきたかのような神道系諸派は、しかしこの新時代にアピールする何物も持ってはいなかった。

こうした危機的状況のなかで、幕末から活動を始める神道系思想家・大石凝真素美は、聖書に匹敵する神道の大神話を創造することとなった。そして、その眼目となったのが恐竜伝説だったのである。

大石凝は、死者の霊と自由に交信できると称し、自らの体に稗田阿礼の霊を降ろして『古事記』の真義を聞き出したと説き、その神話体系を生み出していった。

彼によればすべての生命の起源は、近江が高天原と呼ばれていた（！）時代に、ここに集った神々が発した気が石胞となり、いわばその石の卵から誕生したのだという。

しかも大石凝は、人間の祖型となったのは、金属のように光輝く鱗の肌を持ち巨大な頭を振り立てて岩から這い出してきた、竜の姿であったとしている。彼によれば竜こそは人の祖先であり、その聖なる巨大な力を、我われ人類も継承し得ると説いた。

この大石凝の学説（？）は、その後の新神道系の新興宗教に引き継がれ、大本教の出口王仁三郎やそのイデオローグ浅野和三郎らに絶大な影響を及ぼした。浅野は『大正維新の真相』のなかで、この人類＝竜説を受けて、人へと進化しなかった竜体の一部は、今もなお地中に潜み、竜神として生き続けていると主張した。

さらに荒深道齊は、記紀に記された出雲神話は、実は、人がまだ竜であった時代、つまり恐竜時代（古生物学上の三畳紀から白亜紀にかけて）の歴史を綴ったものだという、何ともスケールの大きい話を述べている。しかし、大石凝の提唱する人類＝竜説にしても、古代人である稗田阿礼の「霊言」ということになってはいるが、なぜか不思議と、近代以降日本に知られたダーウィンの進化論の影響が濃厚に見うけられる。

恐竜が原初的人間の姿であったというこれらの「近代」神話を踏まえて先の山根博士の説明を聞き直せば、ゴジラがなぜ大ダコでもなければ大猿でもなく、恐竜でなければならなかったのかは、自ずと明らかになるだろう。我われが真に注目すべきなのは、一億数千年前のジュラ紀が二百万年前になってしまっていたり、爬虫類から獣類（哺乳類）への進化と水棲・陸棲の区別の混乱などではない。山根博士の不用意な説明が奇しくも明らかにするのは、もっともらしく装われた恐竜出現の根拠の荒唐無稽さではなくて、ゴジラという存在が、時間軸も進化の法則も捻じ曲げた強靭な意志力によって突き動かされる「近代」の生んだ神話の産物だったという、その真相ではないだろうか。

有り得べくもない〈恐竜への郷愁〉の文化史的起源は、「近代」にこそあったのである。

南方という原初の故郷

恐竜を原初的人間とするこれらの「神話」には、もうひとつのコードが隠されている。それは人間を「壊れた自然」とみなすドグマであり、これも近代の産物である。これは自然賛美を装いながらも、人間を自然から隔絶された存在とみなす、特権化の修辞学でもあった。そして、人間でありかつ恐竜でもある存在とは、「自然」を人間の外部と内部の双方から支配する二重の覇権によって統治しようとする完璧の図像学でもあったのだ。

ゴジラは、その物語のなかで公然と唱えられているように、失われた自然力の象徴である。それが、「南方」からやって来ることの意味を問うには、まず「近代」の日本にとって南方とは何だったのかを確認しておく必要があるだろう。

ゴジラが製作された当時、少年読物のなかで南洋諸島や東南アジア、さらにはアフリカや中南米という〈南〉を舞台にした冒険物語群が独自の分野として隆盛を誇っていた。

なかでも、その名も南洋一郎という作家が、戦前から戦後にかけて、一貫して少年小説の分野で縦横の活躍をしていたことを忘れてはなるまい。その主要な作品には、『密林の王者』、『吼える密林』、『日東の冒険児』、『緑の無人島』、『聖火の島』、『緑の金字塔』などをあげることが出来る。これらの本は、当時ポプラ社から出版されており、江戸川乱歩の少年探偵団シリーズと並んで、大衆的児童文化に深く根を下ろしていた。

また『ゴジラ』とほぼ時期を同じくして書かれた山川惣治の絵物語は『少年王者』であり『少年ケニヤ』であった。これも無国籍風南国イメージとしてのアフリカ大陸で、日本人の少年が活躍する物

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com